

北星学園余市高等学校に対する協力会としての学校評価

北星学園余市高等学校協力会
事務局 平野 純生

はじめに

北星学園余市高等学校協力会は、1994年に余市町の経営者有志により北星学園余市高等学校を支援する目的で結成された任意団体です。協力会には2024年度現在、余市町内外で北星学園余市高等学校を支援したいという意思のある会社・団体の代表者など56名の個人が会員として登録しています。

コロナ禍で3年ほど活動は停滞していましたが、今年度は学校の創立60周年記念募金として50万円を寄付することもできました。今後とも学校や生徒たちの活動を支援するための多面的な活動を模索していきたいと考えております。

今年度も昨年度に引き続いて、学校において全校生を対象に行われた意識アンケートの集計結果に基づいて、学校の教育活動についての学校評価を行っていききたいと思います。

全校生徒の意識アンケートの分析について

全校生が現在の北星余市高校での学校生活の中で抱いている意識を聞いた設問を踏まえた分析を①～③の3点にわたって整理し、その分析に基づく学校の教育活動の今後の課題にも言及します。

① 生徒たちが、現在の北星余市高校での自分をどのように自己評価しているか、生徒自身の自己評価については設問5「学校にきちんと通えている」と設問6「平日の朝、決まった時間に起きることができる」、設問8「感情をコントロールできている」、設問9「他者とうまく協力できる」、設問10「自主的に行動できる」の設問への回答に表れています。その5つの設問に対して、「とてもそうだ」と「ややそうだ」と回答した割合はとて多く、多くの生徒が自分に対する肯定的な評価ができているようです。特に設問5の回答ではすべての学年で「とてもそうだ」、「ややそうだ」と答えた割合が8割を超えており学校にきちんと通うことは大切だという積極的な意識が存在していると思われます。また、こうした5つの設問における3年生の回答は、他の学年より肯定的な回答が多くなっていて、3年間の北星余市高校での学校生活の中で大変前向きな自分になっていることを評価していることがうかがえます。

もちろんこれらの5つの設問で、「どちらでもない」「ややちがう」「全くそうではない」と回答した生徒もいますが、全体の中での割合は多くありません。生徒集団としては北星余市高校での学校生活をする自分自身に対して概ね肯定的な評価がされているように思います。

② 学校で行われる教育活動に対して生徒がどのように評価しているかについては、設問17「社会の出来事に関心を持つような機会が多くある」、設問18「将来を考える機会が多くある」、設問21「グループワークや行事の準備など、チームで何かに取り組むことが楽しいと感じる」、設問27「放課後、学校に残ることが楽しい」、設問28「ボランティア活動に抵抗がない」、設問30「宿泊研修（スキーや修学旅行）の参加に不安はない」、設問31「クラス役員など、積極的に引き受けても良い」の設問への回答に表れています。その7つの設問に対して、「とてもそうだ」と「ややそうだ」と回答した割合が、とて多くなっています。このことは、多くの生徒たちが北星余市高校の学校行事と課外活動に対して肯定的な意識を持っていることを示していると思われます。

特に設問 21 に示されるように「チームで何かに取り組むことを楽しいと感じる」生徒の割合が各学年とも 5 割を超えていて、3 年生ではほぼ 8 割の生徒が肯定的に感じていることは大変評価できることです。また、設問 27 で示されていますが、「放課後、学校に残ることが楽しい」と答えた 3 年生が 7 割を超えていることは 3 年間で学校が居場所として感じられるようになってきていることが示されていると思います。

- ③ 自分の周りの人間関係に対する生徒の意識は、設問 7「親子関係は良好なほうだ」、設問 11「学校行事や部活動、課外活動に積極的に参加しやすい雰囲気がある」、設問 12「安心して話し合いに参加できる雰囲気がある」、設問 13「間違えることに抵抗を持たなくて済む雰囲気がある」、設問 19「お互いに助け合う雰囲気がある」、設問 22「努力していることを評価してくれる大人がいる」、設問 23「努力していることを評価してくれる友人がいる」、設問 24「間違った場合、きちんと指摘してくれる大人がいる」、設問 25「間違った場合、きちんと指摘してくれる友人がいる」、の設問への回答に表れています。この 9 つの設問に対して「とてもそうだ」と「ややそうだ」と回答した割合は、非常に多くなっています。

こうした生徒の意識は、北星余市高校での生徒たちを取り巻く人間関係が、とても心地よいものであり、自分に対して正当な評価や激励を期待できる、正常な人間関係が存在していることを示していると思います。そのことは生徒が学校生活を送る上でとても大切な安心感をもたらしていると考えられます。

以上の分析から、今後の学校の教育活動の課題として、次の 2 つのことを指摘することができます。1 つには、昨年度も指摘したことです。これまで北星余市高校が大切にしてきた生徒を集団として育てるための行事や課外活動での取り組みは、今後ともさらに充実させる必要があるということです。生徒たちからの学校の教育活動への評価は概ね高いものですが、そのことを持続するためには、生徒集団が成長するための、時代に合った新しい教育実践に挑戦していくことが必要です。2 つには、それでもまだ、生徒たちの中では設問 11 や設問 12 への回答に示されていますが、肯定的でない回答をする生徒も 4 割以上います。そうした生徒たちも巻き込んでいけるような教育実践をつくることは、今後の北星余市にとっての重要な課題だと思います。

最後に

ここまで生徒の意識アンケートの集計結果の分析を行ってきました。

北星余市高校は、60 年以上にわたる歴史の中で生徒を集団として育てるという方針を持ち、教育活動が行われてきました。そして全国各地から入学した生徒たちは、余市町や後志の地域の方々に育てられ成長し、卒業していきました。

現在、北海道では 50 校以上の全日制の私立高校がある中で、いわゆる「市」ではない「町」にある学校は北星余市高校を含めて 2 校ありますが、先ごろ、白老町にある私立高校が苫小牧市に移転することを検討しているとの報道がありました。もしそうなれば、まさに「町」に存在する私立高校は北星余市高校だけになります。

現在の少子化の中、北星余市高校が小規模でありながらも存続し続けることは容易ではありません。それでも余市町や後志という地域と結びついた教育実践を充実させていけば、そのことが評価され入学者が増える可能性は高いと思われます。教職員と生徒の皆さんは、ぜひそのことに取り組んでいただければと思います。

コロナ禍の中で急激な生徒減や教育活動の制限を経験しながらでも、懸命に、真摯に教育活動に励んでこられ、創立 60 周年を迎えた教職員と生徒のみなさん、そしてその教育活動を支えてこられた保護者の皆様への尊敬と感謝の意を表したいと思います。

以上をもちまして、北星学園余市高等学校協力会としての学校評価とします。